

大和郡山城（続日本百名城）

大和、大和の支配拠点

天正8年織田信長は大和一国の検地と新たに築かれる郡山城以外の城郭の破壊を命じ、筒井順慶を郡山城主にした。その五年後秀吉の弟秀長が入封。その後、譜代大名数家を経て、享保9年（1724）に入封した柳澤氏が6代続き明治維新となった。

城の見所は石垣に残る転用石。良質な石材が乏しい奈良盆地にあって、寺院の石仏や石塔などを供出させた為だという。なかには、平城京羅城門の礎石と伝わる巨石まで使用されている。

歴史

	正平8年（1580）	筒井順慶が織田信長の援助を得て、大和国守護となる
	天正12年（1584）	筒井順慶死後養子の筒井定次は秀吉の命により伊賀上野城で転封
	天正13年（1585）	秀吉の弟秀長が大和国。和泉国・紀伊国三ヶ国100万石余の領主として郡山城に入る
	天正19年（1591）	秀長没後養子秀保も文禄4年に死去。大和大納言家は断絶五奉行の一人増田長盛が入城、関ヶ原後は高野山に追放
	天正20年（1592）	筒井定慶、家康から1万石の知行与えられるも大阪冬の陣後城を明け渡したことを後悔し、大阪落城後果てた
	元和5年（1620）	三河の国から移封、その後備後福山へ転封、松平忠明入城
	寛文11年（1671）	松平忠明に代わって本多政勝、その後松平信之入城。その後転封で本多忠平入城
	享保8年（1723）	本多氏断絶、その後柳沢吉里入城。明治維新まで柳沢氏

*筒井順慶

天正12年8月11日(1584年9月15日)、筒井順慶が没しました。大和国の戦国武将で、「洞ヶ峠」のエピソードでも知られる。天文18年(1549)、順慶は大和国筒井城主・筒井順昭の子に生まれた。筒井家は大和興福寺の衆徒。天文19年(1550)、父の順昭が27歳で病死し、死に臨んで順昭は、自分の跡は順慶が継ぐことを家臣に誓わせ、また自分の死を1年間は秘し、自分の身代わり(影武者)として、自分とよく似た盲目の黙阿弥を言い含めて、城に置き一年後に順昭の死を発表。影武者の役割を終えた黙阿弥はまた元の生活に戻り、ここから「元の黙阿弥」という言葉が生まれた。順政が永禄7年(1564)、順慶が16歳の時に死去すると、*松永久秀が順慶の筒井城を落とし、順慶は一族の布施氏を頼って、布施城に匿われ、順慶と松永の以後13年に及ぶ抗争の始まった。永禄9年(1566)、三好三人衆と手を結んだ順慶は、松永が三好との戦いに追われている間隙を衝いて、筒井

城奪還を図ります。そして形勢不利とみた松永は順慶と和議を結び、筒井城は順慶の手に戻る。翌永禄10年には、順慶は再び三好三人衆と結んで、奈良で松永と戦い東大寺の大仏殿が焼けた。翌永禄11年(1568)、織田信長の上洛し信長が三好三人衆を駆逐するのを尻目に、再び筒井城を攻めて、これを奪います。順慶は福住城に退き、順慶は新たに辰市城を築いて勢力回復に努めました。そして元亀2年(1571)、辰市城の近くで順慶は松永、三好義継連合軍を破り、筒井城を奪還した。同年、順慶は明智光秀を通じて正式に織田信長に臣従した。翌年には松永の多聞山城を攻略、その後、信長の配下として数々の合戦で武功を立てた順慶は、天正4年(1576)には信長によって大和守護に任ぜられた。そして翌天正5年、信貴山城に籠城する松永を討って、ようやく宿敵との戦いにけりをつけ、さらに摂津の荒木村重攻めに参加、天正8年(1580)には居城を筒井城から大和郡山城に移した。天正10年(1582)、本能寺の変で信長が明智光秀に討たれ、光秀は順慶にとって信長への臣従を斡旋してくれた恩人であり、縁戚関係にもあった。光秀は当然、順慶の協力を期待するが、順慶はどうすべきか、島左近、松倉重信ら重臣たちと去就について郡山城で軍議を重ねました。ここから「洞ヶ峠」という言葉の語源と言われる。光秀は順慶が動かないと悟ると、下鳥羽に軍を返し、山崎の合戦で秀吉と戦って敗死。順慶は秀吉のもとに伺候し、秀吉から山崎の合戦に参加しなかったことを叱責されはしましたが、臣従を許されその後、翌年の柴田勝家との戦い、天正12年(1584)の小牧・長久手の戦いにも参加するが、この頃から病床に伏すようになり、ほどなく没した。享年36。松永との大和争奪に相当な時間を費やし、ようやく大和を統一した暁には、信長と秀吉の天下取りに巻き込まれるという生涯だった。

*松永久秀

初めは三好長慶に仕えたが、やがて三好政権内で実力をつけ、久秀は長慶の配下であると同時に室町幕府の傍で活動することも多く、その立場は非常に複雑なものだった。また、長慶の長男と共に政治活動に従事し、同時に同じ官位を授けられるなど主君の嫡男と同格の扱いを受けるほどの地位を得ていた。長慶の死後は畿内の混乱する情勢の中心人物の一人となった。信長が義輝の弟足利義昭を奉じて上洛してくると、一度は降伏してその家臣となる。その後、信長に反逆して敗れ、信貴城で「天下の名茶器平蜘蛛」と共に焼死、自害した。以下は信長が家康に久秀を引き合わせた時に言った言葉とされている

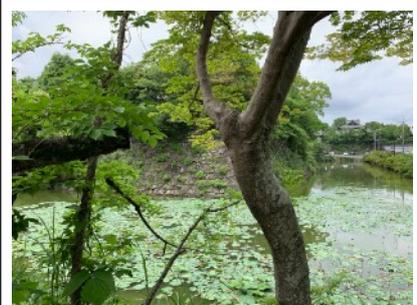
「この男が松永弾正（官名）だ。主家の三好家に背き、將軍を殺し、奈良大仏殿を焼いてしまった。並みの人間なら一つでも無理なことを、なんと三つもやってのけた」



鉄門跡

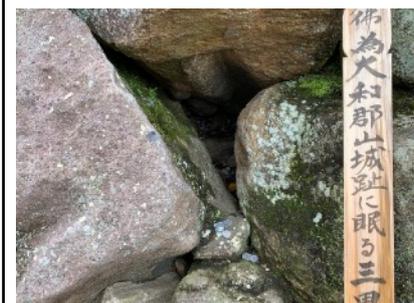
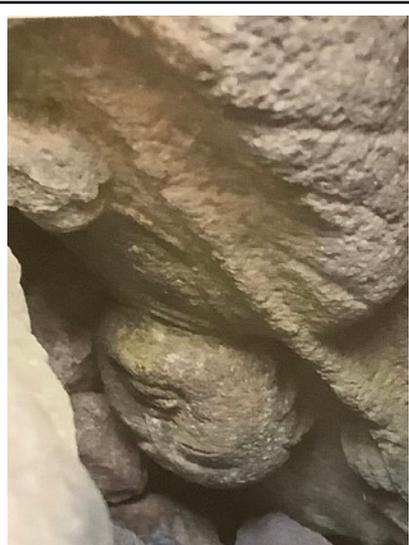
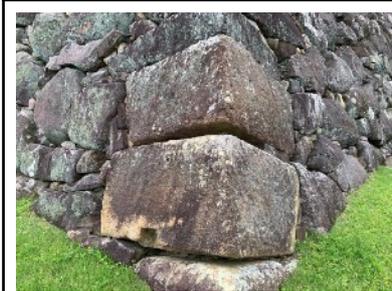


五軒屋敷掘

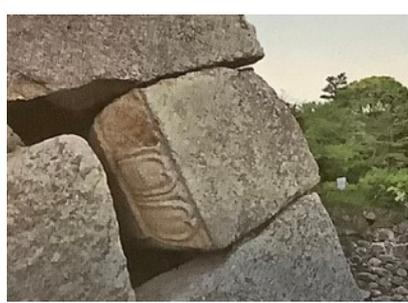




城と言えばお地蔵様を石垣の石材として転用した「さかさ地蔵」で有名。さかさ地蔵のほか、伝羅城門の礎石をはじめ、宝篋印塔や五輪塔、石仏などが多数使われている。城のある西の京丘陵や近隣は全く石の取れない大和郡山い地層。石仏や石塔のみならず石臼のような日用品も紛れていたことから必死にかき集めた様子が伝わります。



大和郡山は良質な石材が乏しい為石仏から石塔まで供出させた。中には平城京羅城門の礎石と伝わるもの、石仏が逆さの状態で見られる。石仏は大永3年(1523)の造立。





野面積の石垣 天守台の石垣は自然石や転用石を野面積で積み上げてている。石の大きさが揃っていない為横目地は通っていない。元和5年から寛永16年にかけて城主だった松平忠明に時代に修築されたものと伝わる。



古式の野面積



追手門（再建）

極楽橋（再建）



竹林門跡

天守台の石垣は自然石や転用石を野面積で積み上げられている



2023年5月29日からの「三重奈良の旅」の二日目三日目に訪れました。

2023年6月8日 記